"All life is an experiment. The more experiments you make the better." (Ralph Waldo Emerson)

管理人はいい歳して未だ中二病であり、異能力戦闘アニメと文章を引用から始めることをこよなく好む。よって、この文章も引用から始まる。「人生は全て実験だ。より多くを試みたものが、人生をよりよいものにできる」。Emersonがどんな人かは存じ上げないが、なかなかいいことをおっしゃる。自分の周りで、幸せな人を思い浮かべてほしい。どんな人だろうか。おそらく、あらゆることに興味を持ち、友達が多く、自分で選んだ仕事に前向きに取り組め、複数回の交際経験がある、そんな人が思い浮かんだのではないだろうか。

そういう人たちと、そうでない人たち。何が違うのだろう。前述のEmersonが正しいなら、答えは簡単だ。実験の、数。それだけである。どれだけ新しいことにチャレンジできたか。やろうと思ったことに、実際どれだけ取り組んできたか。

大学3年生にもなると、否応なく卒業後の進路を考えなければならない。就職活動というものが、目前に迫っているからである。だが、多くの学生にとって、進路を決めるのは簡単ではない。正解のない世界において（この言い回しは実に中二っぽいぞ）、自分の選択に正解をつけられるのは自分だけだ。しかし、肝心の自分のことがわからなければ、正解の選択肢など選びようがない。“実験”に取り組んできた人たちにとっては、20数年は進路を決めるのに十分すぎる長さだ。自分のことを良く知っているからである。逆に、今までの20年ちょっとの人生で、“実験”に取りくまず、日々漫然と与えられたものを消化して生きてきただけの人々にとっては、進路選択は突然やってくるものに感じられるだろう。

僕はまさに後者の人間であった。

そのため、大学3年生のときに困った。大学時代、というか20年ちょっとの人生において、打ち込んできたことなんて何もない。生きてきただけである。ただ、大学卒業の進路選択をミスると生きていけるかどうかも怪しい時代だ。そこで、どうにもなく“実験”をしなければいけなくなった。実験デザインは簡単で、進路において考えられる選択肢全てに挑戦するのである。幸い、僕のような典型的な日本の大学生の典型的な進路の選択肢は、①就職する、②院にいく、の2択しかないので、とりあえず企業のインターンシップに応募し、自分が就職し社会に出て生きていくに足りうる人材か見極めることにした。

結果は、まぁお察しである。まず選考に通らない。本選考ではないぞ。そのずーっと前のインターンの段階で、である。幸い、某外資のコンサルで１週間インターンできることになったが、僕の圧倒的コミュ力不足が炸裂し、良い評価は得られなかった。そこで就職活動を早々に諦め（今考えるともう少し違う業界を見ても良かった）、大学院に行くことにした。問題があった。お金である。

日本の大学院は学費が発生する。僕は理系で、私大に通っており、しかも家が貧しかったので、そのまま付属の院に進学するのはもとより考えてなかった。国立に行くのも考えたが、院からだと完全な学費免除はない。そこで、奨学金を取って海外院に行く選択肢を検討した。もしそれができれば、お金をもらいながら学位を取ることができる。海外経験もないし、英語も自分で勉強していたとはいうものの、コテコテの日本人である僕には難しい。何より、色々調べると海外院に行くために重要なのは学部の成績 (GPA）であり、大学１、２年に勉学に励んでいなかった僕には厳しい。研究実績も皆無である。まさにないないづくしで、ほぼ海外院の留学は現実的ではなかった。ただ、こういう研究をしたいというアイデアは漠然とだがあり、それを志望理由書に熱く書いた。内容は、「これはどこの中２が書いたのかなーｗｗ？」というレベルの、研究計画書、というよりほぼＳＦであったが、当時の社会状況を反映しており、人類のよりよい未来になくてはならないテーマではあったと思う。

驚くべきことに、この“実験”は成功した。ドイツ政府の公募の奨学金に通ったのだ。

毎年、理系枠は4人で、既にドイツでのポジションが決まっている博士課程の人が合格するのが習わしだ。実績もなく成績も普通、ドイツの院にまだ合格していない学部生が、本来取っていい枠ではない。面接前にちょっと話した別の受験生のお姉さんと、受給者の顔合わせの時に会ったら、「なんでいるの？って思った笑」と言われたのが、最も適当な状況説明になっていると思う。

ということで、何かの間違いでドイツに行くことになった。ドイツ語力は０、英語は受け入れ基準はパスしてはいたが、speakingの経験値が圧倒的に足りない。がしかし、money talks. 奨学金を取っていれば、ドイツの院に合格をもらうことは簡単である。興味あるテーマに強そうな、チュービンゲンを選び、奨学金を持っていることと、おそらくコース開設以来初の日本人であることが相手側の興味を呼び、チュービンゲン大学の修士課程に進学することになった。進路が決まったのは、大学の卒業式当日、2013年3月末のことであった。